

# 命なりけり

左右田 健次\*

「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」。新古今の歌にうたわれているこの「命」。これは一般に「生命」の同義語と考えられています。例えば辞書(「国語辞典」、集英社、1993)には、「いのち」とは「生物が生きていくための、もとの力。生命」とあり、「生命」の項を見ると「生物を生物として存在させる根源の力。いのち」と述べてあります。しかし、この二つの言葉の含む所は少し異なるように思います。自然科学の分野ではもっぱら「生命」が使われています。一方、文学の世界では両者はあまり区別せずに使われていますが、「いのち」の方が多いのではないのでしょうか。書き手は前後の文脈に応じて両者を使い分けています。上記のように自然科学の分野では、植物や動物を対象にしたり、人間を生物の一種として見る時には「生命」が使われているのが普通ですが、医療の現場で、個々の患者を対象にした場合には、一般に「いのち」が使われているようです。つまり、書き手、話し手が特定の人の命を対象にする、言い換えればその人の「掛け替えのない生命」を考えに入れるとき、「いのち」となるのです。他方、普遍性のある人や他の生物の命を第三者的に捉えて論じる時、(自然科学ではこれが普通ですが)、「生命」が使われることになります。

さて、「生命」とは何でしょうか。上の定義からも判るように、あまり判然とはしないのです。岩波書店の「広辞苑」(5版、1998)の「生命」の項を見ると、「生物が生物として存在し得るゆえんの本源的属性として、栄養摂取、感覚、運動、生長、増殖のような生活現象から抽出される一般概念」と記されています。その一般概念を知りたいのに、この説明ではますます判らなくなってしまいます。和田博「生命のしくみ：その誕生から脳の働きまで」(化学同人、1992)は大変面白いユニークな本ですが、和田先生(阪大・医・名誉教授)は「いささか文学的表現であるが」と断わりながら生命とは「積極的自己主張」であると定義しておられます。個性的な考えと感心しながらも、少し文学的に過ぎるのではないかと戸惑います。

生化学の立場から考えてみましょう。体の中に生体成分が生体と寸分違わず詰まっているだけでは、生命は存在しません。突き詰めて考えると「生命」とは「生体成分が一定の、つまり、生きるという方向に秩序よく動いている状態」としか言い様がないのです。化学進化の果てにでき上がった生体成分が一定の方向性をもって秩序よく変化している状態とは「代謝が進んでいる状態」とも言えるでしょう。一方、生物個体において、この状態が止まったのが「死」です。さて、多種多様な成分が体制化され、一定の方向に進みはじめたのが、37億年前に起った生命の誕生であります。この生命が誕生したのは、強烈な紫外線が適度に減少した原始スープの海の浅瀬であったろうと言われています。ほ乳類の血液の無機成分が現在の海の成分と良く似ているのが、その一つの証拠という説もあります。正に海は生命の母です。一方、「死」の定義もまた、難しいのです。人の死を心臓死で判定するか、脳死で認めるか、などの論議を思い起こすだけでも思い半ばに過ぎるでしょう。孔子も論語の中で、「未だ生を知らず。いづくんぞ死を知らんや」(先進第十一)と正面きっての議論を避けているのです。いずれにしても、37億年に亘る生命の誕生と発展の経緯を思う時、命の尊さと畏敬の念に打たれずにはられません。

---

\*海洋化学研究所所長